協同学習に対して高校生が抱く苦手意識

教育デザインコース　心理学領域
志村　拓弥、有元　典文

１．はじめに

文部科学省（2015）は「課題の発見・解決に向けた主体的･協働的な学び（いわゆる「アクティブ･ラーニング」）」を重視した。阿部（2016）は「内言の外言化」という観点から、その有効性を述べている。一方で、こうした学びに対して不安や苦手意識を抱える学習者の存在が指摘されている（樋口､2014;石橋他､2014）。

本研究では、ペアやグループという活動形態に着目し、学習者間の相互作用を伴う学習活動を協同学習と定義する。本研究の目的は、すべての学習者にとって意義ある協同学習を実践するため、協同学習に対して学習者が抱く苦手意識を明らかにし、それらを考慮した学習環境のデザインを提案することである。

２.方法

公立α高等学校１学年２クラス（在籍者各 40 人）における生物基礎の授業を対象とした。この授業の担当教員は研究者本人である。調査時期は平成 29 年 4 月 12 日から平成 29 年 6 月 16 日であった。研究に用いた資料は、①事前アンケート、②１学期中間アンケート、③毎授業後の振り返りシート、④生徒の観察、生徒との対話や担任との情報交換の４点であった。授業では、協同学習を積極的に取り入れるように工夫した。また、仲間と学ぶことの意義と、全員が参加する協同学習を目指すことを繰り返し伝えた。

３.結果と考察

本研究では，協同学習に関するアンケートや日頃の対話から，生徒一人一人の回答を得た。得られた回答を授業と関連付け、そうした回答が得られた理由について考察した。

事前アンケートの記述から、協同学習を経験していく中で、対人関係に伴う不安や劣等感を持つことに関する不安が挙げられ、また自身が担ってきた役割を喪失する可能性が示された。

１学期中間アンケートの記述などから、積極性が増加したと感じている生徒には、全員が積極的になれる学習環境の実現や、同程度の学力を持つ生徒が集まるゆえの参加しやすさが影響していると考えられる。

積極性が低下したと感じている生徒には、中学校の頃と同じ役割では参加できなくなっているということ、同程度の学力を持つ生徒が集まるゆえの参加しにくさ、対人場面で感じるリスクが影響していると考えられる。

中学生の頃から傍観的・不参加的な生徒は、学習は個人のものであるという認識があり、協同で学ぶことの意義を感じていないことが考えられる。また、教師の課題設定・伝達の不適切さが影響していると考えられる。

１学期中間アンケート時点に生徒が認識していた苦手意識として､課題設定やグループ編成の不適切さや、全員の参加を実現できていないことが挙げられた。

４．結論

本研究では、高校入学初期の生徒が協同学習を経験していく過程で抱く意識について調査した｡結果から、仲間と学ぶ意義を伝える、間違うことを恐れないなどといった、教師の適切な学習環境づくりが生徒の協同学習への参加を促す可能性が示された。一方で、課題設定やグループ編成の不適切さや全員が参加することの不徹底など、教師の不適切な環境づくりが生徒の苦手意識を誘引する可能性が示唆された。以上のことから、すべての生徒が有意義に学ぶことができる協同学習を実践するためには、それにふさわしい学習環境を教師が適切にデザインしていくことが重要であると結論付けられる。